

互いの思いに気付き、みんなで学級をよりよくしようとする児童の育成

—「話し合いのゴール」をよりどころとした一連の活動における振り返りの充実を通して—

前橋市立桃川小学校 宮野 圭輔

I 研究の背景

「令和7年度まえばし学校教育充実指針」では、互いに協力してよりよい集団生活を築くために、合意形成や意思決定したことを実践する場の設定や実践の成果を振り返る場の工夫が学校の取組例として示されている。

本校の2年生は、学級会で進んで発表することができる児童が多い。一方で、「学級をよりよくしたい」という意識をもって合意された内容を実践したり、その成果を振り返ったりする姿勢が十分に育っていなかった。その背景には、教師が本時の話し合い自体を重視するものの、話し合いの内容を実践へつなげる指導や、実践が課題解決にどのように寄与したのかを児童が振り返るための指導が不十分であったという課題がある。

そこで本研究では、一連の活動の中での「振り返り」を充実させたいと考えた。学級会や実践での一人一人の思いを共有し、児童が互いの思いに気付き、その気付きをいかして次の課題や議題を考えることが、みんなで学級をよりよくしようとする児童の育成につながると考え、本主題を設定した。

II 研究の目的と方法

1 目的

「話し合いのゴール」をよりどころとした一連の活動における振り返りの充実を通して、互いの思いに気付き、みんなで学級をよりよくしようとする児童の育成を目指す。

2 方法

【手立て1】なりたいクラスの姿を明確にする「話し合いのゴール」の設定

学級活動（1）においては、一連の活動（「問題の発見・確認」「解決方法等の話し合い」「解決方法の決定」「決めたことの実践」「振り返り」）を児童が主体的に行うことによって、学級や学校の生活づくりが自発的・自治的に展開される。本研究では、「決めたことの実践」の先にある、なりたいクラスの姿を「話し合いのゴール」とする。「話し合いのゴール」を設定するためには、学級全体にとって必要感のある議題を設定することが重要である。議題を選定する中で児童から出てきた「提案の理由」や「学級目標」との関わりを教師が整理し、実践後のなりたいクラスの姿を明確にする。この「話し合いのゴール」を、一連の活動のよりどころとすることで、児童が常に目的意識をもって活動に取り組み、よりよい学級をつくろうとする意識を高めることを目指す。

【手立て2】児童の思いを可視化し共有するための支援

一連の活動の中で個々の思いを引き出し、学級全体で共有することで、児童が互いの思いに気付くようにする。児童の思いを可視化するために、学級会シート（資料1）を用いる。話し合いから実践後の振り返りまでの一連の活動において一枚のシートを使うことで、

「実践への思い」「実践後の思い」「話し合いのゴールの到達度」のつながりを可視化できるようにする。その後、学級会シートに記した「話し合いのゴールの到達度」の自己評価を集約して、学級全体で共有する。教師は児童に自己評価した到達度の理由を問いかけ、個々の思いを聞き合う場を設定することで、互いの思いを大事にしながら学級全体で課題解決の実感を共有することを目指す。

Ⅲ 実践

本研究では、第2学年1学級24名を対象に、学級活動（1）において議題「2年3組のシンボルをつくろう」において実践を行った。

1 なりたいクラスの姿を明確にする「話し合いのゴール」の設定の実際

本学級では話し合いたいことについて児童がいつでも意見を出せるつぶやきボード（資料2）を教室に設置している。そこに寄せられた意見（資料3）を、朝の会に学級全体で確認したところ、1学期の学級会で実践した「クラス遊び」とは異なる方法でみんなとさらに仲良くなりたいという発言が多くあった。その方法のアイデアを出し合う中で、次の学級活動では「クラスの旗、カルタ、歌、マーク」などを作る活動について話し合うことになった。教師は児童が活動をイメージしやすいように、みんなで作るものを「クラスのシンボル」とすることを助言し、議題を「2年3組のシンボルをつくろう」とした。議題選定の中で出てきた提案理由から「シンボル作りのよさは、作る過程で協力できること」や学級目標の「なかよく元気にすごせるクラス」につながることを児童と確認し、本議題の「話し合いのゴール」を「みんなで協力しながらシンボルを作ってもっと仲良くなる」と設定した。

2 児童の思いを可視化し共有するための支援の実際

「解決方法等の話し合い」の過程では、「友達のことを知ることができるカルタを作ればもっと仲良くなれると思う」「マークならば、どんなマークにするか相談して、協力できそう」など、「話し合いのゴール」を意識した発言が多く出た。出た意見の理由をもとに合意形成を図り、「みんなのことを知ることができるカルタを作る」ことに決定した。学級会の「振り返り」では、学級会シートの「話し合いのゴールにむかって」の欄に、実践への思いを記入する時間を設定した。数名の児童は「仲良く協力しながら作りたい」など、「話し合いのゴール」を書き写しただけの記述であった。そこで、教師は「仲良く作るためにはどうしたらいいのか」「協力しながら作るとは、どんなことか」と実践中の具体的な行動を想起できる言葉がけをして支援した。そして、カルタ作りの実践では、児童が話し合いの時の思いを想起しながら活動できるように、学級会シートを見返す時間を設けた。児童は話し合いで出された「みんなのことを知ることができるカルタ」を目指して、進んで友達に好きなものや得意なことを聞いたり（図1）、カルタの作り方に困っている友達にアドバイスをしたりしていた。休み時間には作ったカルタで楽しく遊ぶ様子が見られた。



図1 得意なことを聞き合う児童

「振り返り」では、まず、教師が話し合いの板書、実践中の様子、完成したカルタなど、

これまでの活動の映像を大型提示装置に提示し、児童が実践時の思いを想起できるようにした。次に、教師は席の隣同士で「やってみて感じたこと」について互いの思いを伝え合う時間を設定し、児童が実践時の思いを十分に想起した後に、学級会シートに「カルタ作りをやってみて感じたこと」を記入するよう促した。そして、児童は「話合いのゴール」にどのくらい近付けたかという視点で到達度を考え、学級会シートの山の部分に到達度を示す印を付けた。その際に、一人の児童が「みんながどう感じたか知りたい」と発言した。他者への関心が高まっている発言を取り上げ、学習支援アプリケーション「オクリンクプラス」を活用して、個々の到達度を一枚のスライドに集約し、大型提示装置に映した。教師が「学級全体として、どのくらいゴールに近付けたと思う？」と問いかけると、児童からは「ゴールに近付いたと思っている子が多いけど、『そこそこ』だと思っている子もあるね」といった学級全体を意識した意見が出た。前向きな思いをさらに学級全体で共有するため、到達度が高いと感じた児童から、それぞれの思いを発表するよう指名した。クラス全体に関心が向いた意見を取り上げ、「振り返り」の最後に教師から「これから半年、みんなで話し合いたいことを出し合って、さらによい学級にしていきたいと思います」と児童に伝えた。

IV 結果と考察

1 「話合いのゴール」の設定に伴う児童Aの目的意識の変容

実践後のアンケートの結果では、「話合いのゴール」を設定したよさについて、「みんなと仲良くなる」「クラスが良くなる」に関する回答が多くあった（表1）。その中で、児童Aは、「『話合いのゴール』は話し合う意味が現れている」と回答した。

表1 「話合いのゴール」のよさについて

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・みんなと仲良くなる、クラスが良くなるなどの、学級会をすることのよさにつながる。（複数人回答） ・「話合いのゴール」を大事にすると、本当にそういうクラスになれるかもしれない。 ・みんなが大事にしているから、自分も大事にしたい。 ・先生や一部の人じゃなくて、みんなで決めた「話合いのゴール」だから、大事にしたい。 ・「話合いのゴール」を大事にすると、意見が思いつく。 ・「話合いのゴール」は、話し合う意味が現れている。ただ遊びたいからとかで話し合うんじゃないくて、「話合いのゴール」に近付いて、いいクラスにするために話し合っているから。（児童A） |
|---|

この児童は、一学期に学級で行ったクラス遊びの際には、「けんかをしちゃったから、ゴールが達成できなかった」と振り返っていた。この一学期の経験と今回の実践での満足感から、「学級会はただ遊びたいからやるのではなく、学級を良くするためにやるのだ」と強く意識するようになったのだと思われる。実践後の振り返りで児童Aは「カルタ作りでは、協力しながらできたから、なんだか仲良くなれた感じがする」と発言していた。

以上のことから、手立て1により、学級会への必要感を高め、全員で学級をよりよくしようとする姿につながったと考えられる。

2 児童の思いの可視化と共有による児童Bの変容

児童Bは、事前アンケートで「友達の考えを聞いて、『なるほど』と思ったことは『あまりない』」と答えていた。「振り返り」の学級会シートでは「意見は一個しか言えなかったけど、みんないい意見で『なんでこんなに言えるのだろう』と思いました」と記述していた（図2）。実践では、隣の席の友達と相談しながらカルタ作りに取り組み、その後の休み時間には友達と一緒にカルタ遊びを楽しむ様子が見られた。

実践後の振り返りで、「話し合いのゴール」への到達度をオクリンクプラスで集約すると、到達度の真ん中辺りの位置に印を付け、学級全体の中では一番下に位置していた（図3）。これは、児童Bが、活動をそのものは楽しかったと感じていたものの、その活動によって「仲良くなる」という「話し合いのゴール」が十分に達成されたとは捉えていなかったと考えられる。児童Bの到達度を見た他の児童からは、「いろいろな感じ方の子がいるけれど、全員がゴールに近付けたと思えるようにしたい」という前向きな発言が出た。授業後の聞き取りで「みんな、いろんなことを考えていると思ったから、自分も、次は『話し合いのゴール』にもっと近付けるように頑張りたい」と述べていた。事後アンケートで「友達の考えを聞いて、『なるほど』と思ったことは『まあまあある』」と答えていた。他の児童の思いに触れ、自分の思いも受け止められた経験を通して、周りの思いに目を向けられるようになったと考えられる。このことから、手立て2によって、互いの思いに気付く姿が見られたと言える。

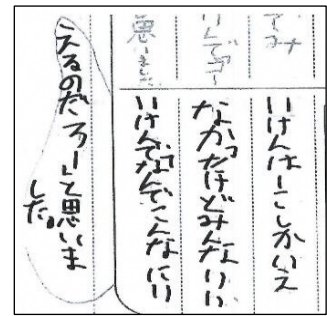


図2 児童Bの振り返り

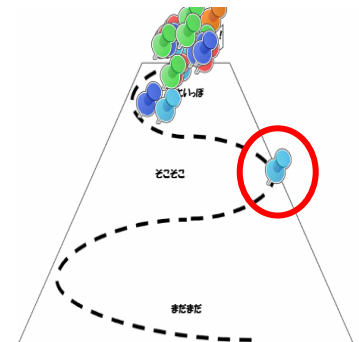


図3 実践後の振り返りの集約

3 手立て1と2を通して

実践後、帰りの会で「トイレのスリッパの並べ方」「体育の準備の仕方」など、生活に関わる改善案を自ら学級全体に呼びかける児童が現れるようになった。これまであまり見られなかった自発的な行動が見られるようになったのは、学級会で経験を重ねることにより、「自分たちが行動すれば学級を良くできるのだ」という意識が児童に芽生えてきたことの表れだと言える。

V 研究のまとめ

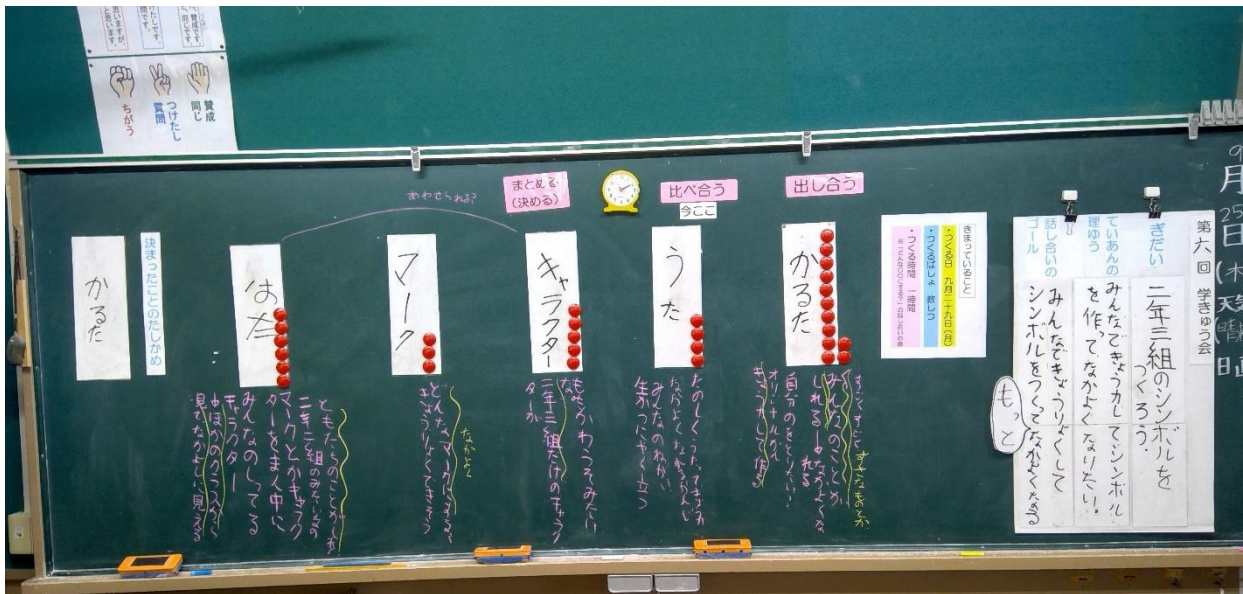
1 研究の成果

なりたいクラスの姿を明確にした「話し合いのゴール」を設定して学級活動を行うことにより、児童が「何のために話し合うのか」という目的意識をもち、実践や振り返りまでを一連の活動として捉えられるようになった。また、一人一人が思いをもった上で実践と振り返りを行い、全体で共有することで、友達の違う感じ方に触れたり、自分の思いが受け止められたりする経験を重ねることができた。児童は「みんなでよりよい学級にしよう」という意識を高めるだけでなく、互いの思いを尊重しながら課題解決に取り組み、学級のために自発的に行動するようになった。

2 課題と今後の展望

学級会シートに「話し合いのゴール」と関連付けながら実践への思いをどのように表現すればよいのかが分からない児童の様子が見られた。「話し合いのゴール」を達成するために児童が具体的な行動や姿を想起しながら、実践に取り組めるようにするための支援の在り方を考えていきたい。

【資料4】板書



【資料5】制作したカルタ



〈参考文献〉

- 岩切香楠子 盛満弥生 (2025) 学級会と決めたことの実践後の「振り返り」に関する研究
 宮崎大学教育学部紀要 第104号 (2025)
- 群馬県教育委員会 (2019) はばたく群馬の指導プランⅡ
- 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別活動編
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2019) 特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動 (小学校編)